

# 中期目標・中期計画一覧表（案）

一 橋 大 学

平成16年4月20日

国立大学法人一橋大学中期目標・中期計画一覧表(案)

中 期 目 標	中 期 計 画
<p>大学の基本的な目標            一橋大学は、市民社会の学である社会科学の総合大学として、日本におけるリベラルな政治経済社会の発展とその指導的、中核的担い手の育成に貢献してきた。人文科学を含む研究教育の水準はきわめて高く、創立以来、国内のみならず国際的に活躍する、多くの有為な人材を輩出している。この歴史と実績を踏まえ、21世紀に求められる先端的社会科学の研究教育を積極的に推進し、その世界的拠点として、日本、アジア及び世界に共通する重要課題を理論的、実践的に解決することを目指す。</p> <p>使命            そのために、次の三つの事項を本学の使命とし、それぞれにつき、グローバルな情報ネットワーク及び人的ネットワークを構築しつつ、より具体的な中・長期的目標を設定する。</p> <p>(1) 新しい社会科学の探究と創造            ・伝統的社会諸科学の深化と学際化及び教育研究組織の横断化            ・言語・歴史・哲学・文学など人文諸科学や、4大学連合における連携を中心とした自然科学的研究との協同            ・研究環境・研究成果の国際的高度化</p> <p>(2) 国内・国際社会への知的・実践的貢献            ・実務及び政策への積極的な貢献</p> <p>(3) 構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成            ・国際性と市民的公共性を備えた専門人教育の本格化            ・教育の再編・高度化</p>	<p>「新しい社会科学の探究と創造」を推進するために、学外者を含む「研究カウンシル」を設ける。</p> <p>* 専門人とは、企画立案型の国家・国際公務員、弁護士や公認会計士、企業関係の高度専門職業人だけでなく、研究者、評論家、ジャーナリスト、NPO参加者など、自己の高度の専門知識によって市民公共的に活動する知的プロフェッショナルを指す。</p>
<p>中期目標の期間及び教育研究上の基本組織            1 中期目標の期間            平成16年度から平成21年度</p>	

<p>2 教育研究上の基本組織 この中期目標を達成するため、別表に記載する学部・研究科及び附置研究所を置く。</p>	
<p>大学の教育研究などの質の向上に関する目標 1 教育に関する目標 (1)教育の成果に関する目標 教養ある市民，市民的公共性と国際性を備えた専門人や政治経済社会のリーダーを育成する。</p> <p>グローバルに通用する豊かな教養と高度の専門知識を統合的に身につけさせる。 最高水準の社会科学研究の成果を踏まえて，構想力と革新性，論理性と倫理性，分析能力と複眼的な視点を与えるためのカリキュラムを構築する。</p> <p>【学士課程】 学生の個々の人格形成を総合的に深め，精神的に豊かな生活を送るための基礎を提供する。 学生が将来，国際的視野を備えた教養ある専門人として，変革期の社会で創造的に活動し，政治経済社会のリーダーとしての確かな方向指示と指導性を発揮しうるための総合的，基本的知識と知力を与える。 高度専門人教育の第一期として，大学院専門教育とも適切に連動する高度な教育を行う。</p> <p>【大学院課程】 21世紀という新時代を最先端の社会科学的知識によって実践的に切り開く高度専門職業人の育成と伝統</p>	<p>大学の教育研究などの質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 1 教育に関する目標を達成するための措置 (1)教育の成果に関する目標を達成するための措置 複合領域・学際領域での4大学連合（一橋大学，東京工業大学，東京医科歯科大学，東京外国語大学）における教育連携をいっそう推進する。 学生，院生の力を国際レベルで最上位に置くために，グローバルな視点から留学生の増加，学生，院生の海外提携校等への留学，海外の招聘教員による授業などを推進する。 「構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成」をめざす「教育の再編・高度化」を推進するために，平成16年度に教育委員会のもとに全学教育WGを設ける。全学教育WGは，学部教育と全学共通教育の再編・統合，学部教育と大学院教育との体系的な一体化，新教育カリキュラムの導入について検討する。 各年度の学生収容定員は別表のとおりである。</p> <p>(1)-1. 教養教育の成果に関する具体的目標の設定 &lt; 人格と市民性の涵養 &gt; 少人数による全学共通教育の充実を図り，人格と市民性の涵養を目指す。 &lt; 専門人，社会のリーダーとなるための基礎教育 &gt; 全学教育WGが中心となって，英語によるコミュニケーション力，統計，データ分析力，リサーチメソッドロジーなど，グローバルな高度専門人や社会のリーダーに求められる基礎スキルを検討，充実する。 外国語教育に関して，平成16年度中に根本的な検討を行う。</p> <p>(1)-2 学部・大学院教育の成果に関する具体的目標の設定 【学士課程】 &lt; 政治経済社会のリーダーの育成 &gt; 教養と専門的知識を統合し，国際的視野を有した人材を育てるために，全学教育WG案に基づいて教養，専門の在り方を根本的に再検討する。 インターンシップの推進，単位化など，体験型教育の実施を積極的に盛り込み，社会的使命，倫理及び社会現実を深く学ばせ，高い倫理観と実務感覚を付与する。 複合領域・学際領域での4大学連合における教育連携をいっそう推進し，学際的知識と新しい社会科学への芽を育てる。 &lt; 高度専門人教育の開始 &gt; 大学院との連携を図り，それぞれの部局に相応しい形でカリキュラムを構築し，高度な専門人教育を開始する。 専門外の人文・社会・自然科学的素養を高めるために，学部内外において副専攻または副専攻的コース制度を導入し，選択の幅を広げる。</p> <p>【大学院課程】</p>

<p>的社会諸科学の深化及び新しい社会科学の形成，発展に寄与しうる研究者の育成を図る。 国際的なレベルで高度の専門職業人・研究者教育を提供することを目指す。 グローバル化時代の政治，経済，文化的国内・国際交流＝競争に対応する教育成果をあげる。</p>	<p>&lt;本格的な専門人教育の推進&gt; (高度専門職業人教育) 実務・政策研究に基づく新しい社会科学の教育カリキュラムを作成し，国際的に通用する問題解決型の高度専門職業人の育成に努める。 リカレント教育を重視し，社会での経験に配慮した選抜方法をとる。 エクスターンシップなど実践的教育を重視する。</p> <p>(研究者教育) RAを積極的に登用するなど伝統的社会諸科学，とくにその基礎的研究に従事する研究者の育成に努める。 COEに参加させるなど，新しい社会科学の発展に貢献する国際的にも先端的でトップレベルの研究者の育成に努める。 コースワーク制度の徹底など研究者養成プロセスをより厳密に実施し，課程博士の質的，量的向上を図る。 RA制度などの充実を図り，プロジェクト研究と有機的に結合した教育を行う。</p> <p>&lt;多様化の推進&gt; 複合領域・学際領域での4大学連合による教育連携を大学院でも進める。 国際的な研究教育交流に基づき，授業を多様化する。 修了要件の見直しなど学位授与過程の多様化を図る。</p> <p>(1)-3.卒業後の進路などに関する具体的目標の設定 学生の能力，希望に沿った卒業後の進路確定のために，情報を整備し，相談体制を整える。</p> <p>【学士課程】 平成16年度中に就職支援室を設置し，就職支援相談体制を充実する。</p> <p>【大学院課程】 優秀な院生の研究に対する財政的支援を充実させる。とりわけ，レフリー付きの評価の高い研究誌に論文が掲載されるか，学会発表を行った学生に対する支援を平成18年度までに検討する。 就職及び社会進出のための支援体制を充実させる。</p> <p>(1)-4.教育の成果・効果の検証に関する具体的方策 教員に対しては授業評価とそのフィードバックを徹底させると共に，学生に対しては厳格な成績評価とそのフィードバックを徹底させる。</p> <p>【学士課程】 GPAについて，平成16年度から検討を進める。</p> <p>【大学院課程】 大学院生の論文発表数，学会発表数，日本学術振興会特別研究員採用状況などを毎年調査し，平成17年度からネット上で公表する。</p>
<p>(2)教育内容などに関する目標 (2)-1.アドミッション・ポリシーに関する基本方針 大学院重点化と学部学生への社会の期待を勘案して，定員の配置を考える。 学生の多様性をより高める。 【学士課程】 アドミッション・ポリシー 高等学校での教育のプロセスなどに着目した入学者</p>	<p>(2)教育内容などに関する目標を達成するための措置 (2)-1 アドミッション・ポリシーに応じた入学者選抜を実現するための具体的方策 教育目標に即したアドミッション・ポリシーを策定し，より多様な学生の受け入れを可能にするように入学試験を点検・改善する。 留学生の10月入学を平成16年度に検討する。</p> <p>【学士課程】 オープン・キャンパスや受験説明会，受験者向けの案内冊子，ポスター，ホームページなど，広報活動を充実させる。</p>

<p>選抜方法の改善を図る。 一橋大学の基本的な目標や使命を社会に明確に伝える。 留学生を積極的に受け入れると同時に、転学部や編入などにより多様な学生を確保する。</p>	<p>一橋大学にふさわしい学生が受験するよう入学試験の環境を整える。 入学試験関連の業務を専門に取り扱うアドミッション・オフィス設けることを平成19年度までに検討する。 AO入試の拡充を検討する。 4大学連合からの編入を引き続き推進する。</p>
<p>【大学院課程】 アドミッション・ポリシー 選抜に際して、各部局の求める人材象を鮮明にし、その観点からそれに相応しい選抜方法を取る。 専門人教育の強化をはかるために、部分的に学部・大学院一貫の教育を可能とする選抜方法や広く多様な人材の確保を可能とする方法を採用する。 留学生を積極的に受け入れるため、入学試験方法やその時期などについて制度改革を行う。</p>	<p>【大学院課程】 大学院の活性化を図るために、多様な学生の積極的な受け入れに努める。 学部・大学院一貫教育を反映する入学試験制度をそれぞれの部局に相応しい形で導入ないし充実させる。 TOEFLなどの外部試験の利用など、国際的に活躍する人材に必要な英語力を考査するための入学試験の在り方を平成16年度中に検討する。 外国人学生が英語による書類選考などで海外在住のまま入学試験を受けることのできる制度を充実する。</p>
<p>(2)-2.教育課程，教育方法，成績評価などに関する基本方針 【学士課程】 教員と学生とが相互に刺激しあう，緊張感のある教育環境をもたらすことをカリキュラム・デザインの基本方針とする。 【大学院課程】 高度専門職業人に必要な，高い理論的知識と応用能力，問題発見能力と分析能力，政策形成能力と問題解決能力，国際的視野と国際的活動能力を開発，鍛錬するカリキュラムを構築する。 高水準の研究者を養成するために，高度の研究環境を整える。</p>	<p>(2)-2-1.教育理念などに応じた教育課程を編成するための具体的方策 カリキュラム及び学部横断的な教育を構想する組織として平成16年度に全学教育WGを設置する。 全学教育WGが大学教育研究開発センターの全学共通教育開発プロジェクトにおける研究成果をもふまえ，大学院も含めて，教養，専門教育を再構築するための基本計画を策定する。 全学教育WGの方針に沿って新カリキュラムの構築を図る。 社会の変化に対応するために寄付講座などを積極的に実現する。 ゼミナールなど対話的，双方向的授業を充実，発展させる。 学外から積極的にすぐれた研究者を招き，先端的・学際的国際的水準の研究に常に触れる機会を与える。 学際性を高めるために，他大学，他学部・研究科とのカリキュラム上の連携を深める。 プロジェクト研究と有機的に結合した，オン・ザ・ジョブ・トレーニングを重視し，プレゼンテーション能力，研究調査能力を高める。 (2)-2-2.授業形態，学習指導法などに関する具体的方策 平成16年度中に，IT補助手段の充実を図る。 平成16年度中に，講義要綱を改善し，授業内容の標準化・学習の到達基準・成績基準を明確にする。 平成20年度までに講義要綱を全学レベルで電子化し，授業ウェブサイト充実する。 平成16年度から，教育指導方法について体系的なFDを行う。 (2)-2-3.適切な成績評価などの実施に関する具体的方策 公正かつ明確な基準をもち，国際的に利用可能な成績評価システムを確立する。 平成16年度から各科目での到達目標を明示し，成績評価基準を公開する。 成績評価を目標達成度の観点から厳格化し，GPA制度との連結を図る。 GPA制度の導入にあたって，一定のGPAに到達しない学生に対する対応を検討する。</p>
<p>(3)教育の実施体制などに関する目標</p>	<p>(3)教育の実施体制などに関する目標を達成するための措置</p>

<p>(3)-1.教職員の配置に関する基本方針  全学教育WGの提言にもとづいて、教育組織の在りかたについて検討する。  高いレベルの教育を行う体制を整備するため、柔軟な人事政策を導入し、学部・大学院双方に及ぶ教育体制を構築する。</p>	<p>(3)-1.適切な教職員の配置などに関する具体的方策  教員の流動性を確保するために任期制を活用する。  教員採用に際して、部局の構想，社会の要請に照らして必要度の高い人材を採用する。その際、ジェンダーなどのバランスにも配慮する。また、国内外の諸機関との人事交流も、より柔軟な採用を通して活性化する。  全学共通教育の実施体制を整え、人的資源を含めた教育資源の流動的かつ適切な配置を図る。  教員採用の際には、研究能力とともに、従来以上に教育能力を考慮した選考を行う方法を検討する。</p>
<p>(3)-2.教育環境の整備に関する基本方針  講義における教材作成や教材資料の蓄積，および必読文献集の作成を促進するための，教育支援体制を整備する。  教室の教育設備を充実させ，IT環境を整備する。</p>	<p>(3)-2.教育に必要な設備，図書館，情報ネットワークなどの活用・整備の具体的方策  電子機器，AV機器の充実を図り，その活用によって理解しやすい授業をめざす。  本館，附属図書館を始めとする教育設備を充実させる。教室など物的設備を充実させる。  総合情報処理センターを中心として，情報網インフラストラクチャーを充実させる。  平成19年度までにe-Learningのようなネットワークを活用した教育システムの導入を検討する。  平成19年度までに履修登録や講義情報などについてのネットワークを用いた教育支援システムを整備する。  情報リテラシー教育支援のための附属図書館設備の充実を図る。</p>
<p>(3)-3.教育の質の改善のためのシステムなどに関する基本方針  外部からの評価を含めた教育成果のレビュー体制を確立し，カリキュラムの継続的な改善を図る。  学生による授業評価システムを充実させ，的確な評価を実施してその成果を活用する体制を整える。  教員の教育レベルを高めるための方策を実施する核となる組織として，大学教育研究開発センターを充実させる。  教育へのインセンティブを与える。</p>	<p>(3)-3-1.教育活動の評価及び評価結果を質の改善につなげるための具体的方策  平成16年度から大学教育研究開発センターを中心として，授業評価，FD・授業改善支援，教育システム・カリキュラム開発を連結した教育向上システムの構築を進める。  平成19年度までに多面的な評価体制を確立し，カリキュラム改革と授業改革に活かす。  学生による授業評価を引き続き行い，その結果を公表する。  教員の教育活動の改善を可能にする体制を整備する。  平成18年度を目途とする評価体制の確立を前提に，高い評価を得た教員に対して，何らかの優遇措置を与える。  平成16年度から教育プロジェクトを募集して，助成金を与える。  平成16年度から教育プロジェクト審査会を設ける。</p> <p>(3)-3-2.教材，学習指導法などに関する研究開発及びFDに関する具体的方策  平成16年度から大学教育研究開発センターにおいて，教材開発，学習指導法に関する研究開発を行う。  平成16年度から学部教育に関する全学FDに関する具体的計画・実施を大学教育研究開発センターにおいて行なう。</p> <p>(3)-3-3.全国共同教育，学内共同教育などに関する具体的方策  (全国共同教育)  複合領域・学際領域での4大学連合による教育連携を深化する。  多摩4大学(東京外国語大学，東京学芸大学，電気通信大学，東京農工大学)を含めた他大学との単位互換制度の改善を図る。</p> <p>(学内共同教育)  全学教育WGでの検討をもとに，全学共通教育に関する全学協力体制を改善する。  平成16年度から大学教育研究開発センターにおいて，全学共通教育の企画・運営及びその在り方の研究開発をおこなう。  留学生センターにおいては，留学生の日本語教育などに責任をもつ組織として留学生を支援し，</p>

	<p>大学の国際化に貢献する。</p> <p>(3)-3-4.学部・研究科などの教育実施体制などに関する特記事項 平成16年度に修士課程専修コースに「公共政策プログラム」、「統計・ファイナンスプログラム」および「地域研究プログラム」を新設する。(経済学研究科) 平成16年度に紛争解決学プログラムを設置する。(社会学研究科) 国立国語研究所及び留学生センターと日本語教育に関する連携講座を設置する。(言語社会研究科) 平成19年度までにアカデミック・マネジメントプログラムの設置を検討する。(言語社会研究科)</p>
(3)-4.高度専門職業人を育成するために専門職大学院を設置する。	<p>(3)-4.専門職大学院の設置など 平成16年度に法科大学院を設置する。(法学研究科) 公共政策大学院の設置を推進する。(経済研究科・法学研究科) 知的財産大学院の設置構想を検討する。(国際企業戦略研究科)</p>
(4) 学生への支援に関する目標	(4) 学生への支援に関する目標を達成するための措置
(4)-1.学生への学習支援に関する基本方針 学習相談・学習指導体制を充実する。 ネットワークによる支援体制を整備する。 講義要綱・授業体制を充実させ、学習プロセスを明確化する。 留学生に対する支援システムを整備する。 インターンシップなど社会との関係を深める教育活動を整備する。 学生のインセンティブを刺激できるような支援システムを構築する。	<p>(4)-1.学習相談・助言・支援の組織的対応に関する具体的方策 平成18年度までにTAの配置計画を見直し、制度の充実を図る。 大学教育研究開発センターを中心に、教材開発や教育カリキュラムを開発し、そのためのシステムを整備する。 教材データベースや、解答データベースを整備し、ITを利用した自習システムを導入するなど、コンピュータを利用した授業時間外の自習体制を強化する方策を講ずる。 平成16年度中にオフィスアワーを実施するなど、学習、生活双方における指導、相談体制を充実する。 留学生に対するチューター制度を充実する。</p> <p>インターンシップを受け入れる企業などを拡充する。 成績優秀者などの顕彰制度や独自の奨学制度などの導入を検討する。</p>
(4)-2.学生への生活支援に関する基本方針 生活施設・生活環境を高水準化し、快適な大学生活環境を整備する。 学生支援のための全学的な体制整備を図る。	<p>(4)-2-1.生活相談・就職支援などに関する具体的方策 平成16年度中に学生支援センターを設置し、その下に学生相談室と就職支援室を設けて、学生生活や就職支援に関して助言、相談体制を充実、整備する。 保健センターを中心に学生に対する健康・メンタルケアを充実する。 身障者に配慮した環境を整備する。 キャンパスライフ相談室(セクシュアルハラスメント相談室)と学生相談室の連携を図り、セクシュアルハラスメントのない環境作りを目指す。</p> <p>(4)-2-2.経済的支援に関する具体的方策 奨学金制度の新しい在り方について検討する。 留学生援助の充実を図る。</p> <p>(4)-2-3.社会人・留学生などに対する配慮 平成19年度までに留学生に対する奨学金や生活環境の在り方について検討する。 社会人向けの学習・研究環境の整備を図る。</p> <p>(4)-2-4.生活環境の整備などに関する具体的方策 東・西プラザを含めて、学生の交流スペースを充実する。</p>

	兼松講堂，附属図書館，本館など歴史的建造物の有効利用を図るなど，キャンパスの美的環境整備に努力する。
<p>2 研究に関する目標</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果などに関する目標</p> <p>(1)-1. 目指すべき研究の性格と水準に関する基本方針</p> <p>世界第一級の研究環境，グローバルなネットワークの構築，伝統的社会諸科学の深化と学際化及び研究組織の横断化などを通じて，21世紀の社会現実に即応した新しい社会科学の創造をめざし，先端的で高度な研究成果をあげる。</p> <p>人文科学，社会科学，自然科学の融合を目指した創成的ディシプリンの案出をめざす。</p> <p>学界・社会の共有財産となるデータベースや適切な政策提言など，国際的水準の質の高い公共的な成果を生み出す。</p> <p>個人研究とともに，COEなどプロジェクトベースの研究を積極的に推進し，大学院教育と緊密に連動させる。</p> <p>実社会での最先端の問題発見・解決に資する，産・官・国際機関などとの共同型研究を行う。</p>	<p>2 研究に関する目標を達成するための措置</p> <p>(1) 研究水準及び研究の成果などに関する目標を達成するための措置</p> <p>(1)-1-1. 目指すべき研究の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい社会科学の探究と創造。</li> <li>・社会科学の理論・実証研究における国際的な拠点形成。</li> <li>・政策評価・提言，社会との連携など公共性の高い研究。</li> </ul> <p>上記研究を達成するため以下の措置をとる。</p> <p>平成16年度に学内を横断し，学外者も参加する研究カOUNシルを発足させる。</p> <p>研究カOUNシルは，</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会科学研究の世界的拠点化への基本計画の策定</li> <li>・新しい社会科学の創造及び伝統的社会諸科学の深化と学際化のための重点領域とその推進計画の策定</li> <li>・大学研究組織改革原案の作成</li> <li>・個人研究評価制度の基本設計</li> </ul> <p>などを行う学長の諮問機関である。設置期間は，当該中期目標期間内とする。</p> <p>研究カOUNシルの答申に基づき，学内審議を経て重点領域の研究を推進し，学際化と横断化を視野に入れ，社会の新しい需要に対応する柔軟な人事の運用をめざす。</p> <p>中期計画期間中に個人研究評価制度を設計する。研究評価制度には優れた国内外の研究者を積極的に参加させる。</p> <p>平成16年度にCOEなどの競争的な外部資金を獲得，推進するための全学的体制を整備する。</p> <p>平成16年度から重要な基礎的研究，画期的な萌芽的研究や学際的研究，公共性の高い共同研究などを大学プロジェクトとして認定し，支援を行う。プロジェクトの一部にはオープン・ラボ形式の性格を持たせ内外から参加者を公募する。</p> <p>プロジェクトの成果を海外に発信するため国際コンファレンスを積極的に行なう。</p> <p>平成16年度から戦略的事業資金により，大学プロジェクトを支援する（競争力を持つ大学プロジェクトについては外部資金の獲得を重視し，本資金による支援は萌芽的な研究の育成や研究拠点維持などの機能を重視する。）</p> <p>平成16年度中にCOE申請プロジェクトや大学プロジェクトの事前・中間審査を行う研究プロジェクト審査会を設ける。</p> <p>平成18年度までに研究専念制度を開始する。</p> <p>研究者（教員）の海外派遣制度の充実を図る。</p> <p>平成16年度から海外著名研究者等の招へい制度を設ける。</p> <p>(1)-1-2. 大学として重点的に取り組む領域</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会・人文科学研究の厚い蓄積を踏まえ，日本，アジア及び世界に共通する現代社会の最も重要な課題を対象として，その理論的，実践的解決を目指す。</li> <li>知識・企業・イノベーションのダイナミクス</li> <li>現代経済システムの規範的評価と社会的選択</li> <li>社会科学の統計分析拠点構築</li> <li>紛争予防と秩序形成</li> <li>アジア地域研究</li> </ul>



	<p>企業・団体の社会的責任の法制度設計</p> <p>市民社会の新しい基盤創出のための総合研究</p> <p>多言語社会と文化アイデンティティ・混成文化論</p> <p>プライシングとリスク管理</p> <p>企業経営・産業とそれを取り巻く制度・インフラストラクチャー</p> <p>ヨーロッパの革新的研究 - 衝突と和解 -</p>
(1)-2.成果の社会への還元に関する基本方針 研究成果を積極的に世界に公表していくと同時に、教育の場面で活用できる環境を整備する。 産・官・外国政府・国際機関・NPOや地域コミュニティーに専門的知識による助言などの支援活動を行う。 官・民及び国際・国内の高度専門人との共同研究やそのリカレント教育を推進する。	<p>(1)-2-1.成果の社会への還元に関する具体的方策</p> <p>確実な研究実績に基づき、高い国際性・中立性を持った立場からの政策提言を行う。</p> <p>データベースを作成し、官公庁やNPOなどにデータが活発に利用されることを目指す。</p> <p>社会への貢献が客観的に示される官庁・海外国際機関・NPOとの共同研究を相当数行うことを目指す。</p> <p>政府、国際機関などへの助言活動を積極的に行う。</p> <p>中央省庁審議会や地方公共団体における各種委員を教員が積極的に勤める。</p> <p>国内・国外のレフリー付学術雑誌のみならず、一般の専門雑誌、教養雑誌、新聞などでも積極的に研究成果を示し、社会に還元する。</p> <p>国内・国際のシンポジウムや研究会を開き、問題提起や政策提言を行う。</p> <p>COEや大学プロジェクトの研究成果や政策提言・作成統計などを平成17年度から随時データベース化し公開する。</p> <p>(1)-2-2.研究水準・成果の検証に関する具体的方策</p> <p>研究成果（学術雑誌、学術書・一般雑誌・新聞・学会などでの研究発表、新聞などマスコミでの報道、データベースの外部利用実績など）、学会組織の役員職の就任と頻度と期間、学術賞の受賞歴、学術誌・叢書の編集者担当歴、サイテーション・書評の頻度などを整理し公表する。</p> <p>研究成果の評価を各研究組織・大学プロジェクトについて定期的に行い、結果を公表する。</p> <p>学会賞・学術図書賞など、学術的な成果に対する受賞を相当数獲得することを目指す。</p> <p>(1)-2-3.国際的研究拠点形成のための具体的方策</p> <p>国際共同研究センターをアジア研究などの交流拠点として活用する。</p> <p>EUインスティテュート運営の拠点として内外の大学と積極的に交流する。</p> <p>社会科学の世界的拠点化を目指して、国外研究機関との研究ネットワークの形成をスタッフの派遣や受け入れ、大学院生のOJT派遣などによって促進し、国際シンポジウム・コンファレンスを企画・開催するとともに、政府・国際機関・シンクタンク・NPOなどとの共同研究プロジェクトを推進する。</p> <p>国際性・公共性の高い研究成果を広く海外に発信する。</p> <p>研究プロジェクトの時限終了後も、研究ネットワークの維持やデータベースの更新を行う。</p> <p>国際シンポジウムや研究者の相互交流、一橋大学で学習・研究・滞在した外国人研究者の国際的組織化を推進し、これらに関する有用なデータベースを作成する。</p> <p>(1)-2-4.研究成果の産業界への還元などに関する具体的方策</p> <p>産業界が研究成果を活発に利用できる環境作りを目指す。</p> <p>連携先による評価などにより産業界への貢献が客観的に示される産学共同研究を積極的に行う。</p> <p>産業界への助言活動を活発に行う。</p>
(2)研究実施体制などの整備に関する目標 (2)-1.研究者などの配置に関する基本方針	<p>(2)研究実施体制などの整備に関する目標を達成するための措置</p> <p>(2)-1-1.適切な研究者などの配置に関する具体的方策</p>

<p>研究カウンスルへの諮問及び答申により設定される複数の重点領域分野に対して、中長期的戦略のもと優先的に研究人員を配置する。</p>	<p>大学プロジェクトなどに対応して柔軟に人材を配置する。  平成14年度より開始された「4大学連合」を基礎として、人文科学、社会科学、自然科学の融合を目指し、3大学との連携を共同研究レベルにまで深め、学際プロジェクトを推進する。  社会科学の世界的拠点化と国内外研究機関との研究ネットワークの形成のために、外国人客員教授制度、任期制研究員制度、及び客員研究員制度を活用し、多様な研究者の受け入れの拡大を目指す。  RA制度の充実を図る。  外国語能力のある研究支援・事務支援スタッフの充実を図る。</p>
<p>(2)-1-2. 研究資金の配分システムに関する具体的方策  研究カウンスルや部局の意見を参考にしながら、各重点研究分野や基礎的研究分野に配慮した配分を行う。  財源としてはCOEや他の委任経理など、競争的な外部資金の獲得を目指す。この獲得を推進するために平成16年度中に全学的体制を整備する。社会貢献活動を通じての報酬確保の途も積極的に模索する。  平成16年度に学外からの資金の適正な配分ルールを定める。プロジェクト・ベースで確保される財源については各プロジェクトが執行権限を有するが、応分の全学共通経費を負担する。  外部研究資金を得た大規模共同プロジェクト責任者に対して、学内の他の負担を軽減するなど資金を運用しやすい環境を整える。</p>	<p>(2)-1-2. 研究資金の配分システムに関する具体的方策  研究カウンスルや部局の意見を参考にしながら、各重点研究分野や基礎的研究分野に配慮した配分を行う。  財源としてはCOEや他の委任経理など、競争的な外部資金の獲得を目指す。この獲得を推進するために平成16年度中に全学的体制を整備する。社会貢献活動を通じての報酬確保の途も積極的に模索する。  平成16年度に学外からの資金の適正な配分ルールを定める。プロジェクト・ベースで確保される財源については各プロジェクトが執行権限を有するが、応分の全学共通経費を負担する。  外部研究資金を得た大規模共同プロジェクト責任者に対して、学内の他の負担を軽減するなど資金を運用しやすい環境を整える。</p>
<p>(2)-2. 研究環境の整備に関する基本方針  先端的な研究拠点・情報発信基地としての大学の使命を果たし、国際的学術ネットワークを形成し、必要な投資の財源の開発・確保に努め、全学的な視点からの基礎投資を積極的に行う。  教員や学生の研究をサポートするためのインフラ投資を十分に行い、世界トップ大学の水準に近づける。</p>	<p>(2)-2-1. 研究に必要な設備などの活用・整備に関する具体的方策  国際共同研究センター、経済研究所、附属図書館、社会科学古典資料センター、及び各研究科の共同研究組織などを活用し、独自に開発したデータベースや創生的ディシプリンを基盤として、全国共同研究の中核となる。  IT活用による全学情報化を推進する。  附属図書館のサービス向上のため電子化（目録情報など）を推進する。  研究室を拡充・整備し、研究を行う建築物全体の環境を改善することを目指す。</p> <p>(2)-2-2. 知的財産の創出、取得、管理及び活用に関する具体的方策  平成16年度中に知的財産に関する検討組織（知的財産委員会）を設ける。</p>
<p>(2)-3. 研究の質の向上システムなどに関する基本方針  透明性・客観性の高い研究評価を自己評価、外部評価の両面から定期的実施する体制、およびその評価を質の高い研究の促進および支援に結びつけるシステムを整備する。  教員を画一的に扱うことを見直し、希望、特性、評価などに応じた負担、役割、資金配分などを可能にする。</p>	<p>(2)-3-1. 研究活動の評価及び評価結果を質の向上につなげるための具体的方策  大学評価委員会を中心に平成18年度までに各部局の研究活動を評価するシステムを構築する。  平成21年度までに透明性・客観性の高い研究評価を促進するための研究評価制度を設計する。  研究評価には外部組織のメンバーも入れ、評価の厳正化を図る。この制度では、評価結果をなんらかの優遇措置と連動させることを目指す。  平成16年度から業績リストを始めとする教員の研究成果一覧を毎年公開し、高い水準の研究が常に行なわれているように配慮する。</p>
<p>(2)-3-2. 全国共同研究、学内共同研究などに関する具体的方策  全国共同研究においては、オープンラボ形式の研究プロジェクトを推進し、公募により学外研究者を国内客員研究員などとして受け入れることを目指す。  経済研究所附属社会科学統計情報センターは、社会科学統計に関する情報を収集・整理し、全国学術研究者の公開利用に供する。  附属図書館及び社会科学古典資料センターは、全国の専門家を対象とする講習会を充実させる。</p>	<p>(2)-3-2. 全国共同研究、学内共同研究などに関する具体的方策  全国共同研究においては、オープンラボ形式の研究プロジェクトを推進し、公募により学外研究者を国内客員研究員などとして受け入れることを目指す。  経済研究所附属社会科学統計情報センターは、社会科学統計に関する情報を収集・整理し、全国学術研究者の公開利用に供する。  附属図書館及び社会科学古典資料センターは、全国の専門家を対象とする講習会を充実させる。</p>
<p>(2)-3-3. 学部・研究科・附置研究所などの研究実施体制などに関する特記事項  日本及び世界経済に関して公共性、継続性の高い国際的な共同研究を行う中核的研究拠点として、</p>	<p>(2)-3-3. 学部・研究科・附置研究所などの研究実施体制などに関する特記事項  日本及び世界経済に関して公共性、継続性の高い国際的な共同研究を行う中核的研究拠点として、</p>

	<p>経済研究所を位置づける。</p> <p>時限付研究センターであるイノベーション研究センターについては、将来のさまざまな組織形態の可能性をも考慮しながら、イノベーションをテーマとする研究活動を推進する。</p> <p>附属図書館は、社会科学系外国雑誌センター館でもあり、高度な資料・学術情報の中核的拠点として、その役割の充実を図る。</p> <p>社会科学古典資料センターは、社会科学古典資料を収集管理し、研究に寄与する。</p> <p>総合情報処理センターは、本学情報処理システム及びネットワークシステムの整備・運用・管理を行い、研究・教育の向上と事務処理の効率化に寄与する。</p>
<p>3 その他の目標</p> <p>(1) 社会との連携, 国際交流などに関する目標</p> <p>(1)-1. 教育研究における社会との連携・協力に関する基本方針</p> <p>〔地域社会との連携協力を推進するための基本方針〕  地域住民, 社会人一般に向けた教育サービスを行う。  地域社会, 産官, 国内外機関などに対し, 専門的知識による助言などを行う。  一般の専門雑誌, 教養雑誌, 新聞などで積極的に研究成果を示し, 社会に還元する。</p> <p>〔産業界との連携・協力を推進するための基本方針〕  社会科学分野における産学連携のモデルとして先駆的成果をあげることを目指す。  教育面での産業界との連携を推進するため, 産学連携の場を積極的に確保する。  実社会での最先端の問題発見, 解決に資する, 産学官共同型の研究を行う。  産学合同研究プロジェクトを奨励し, 教員, 大学の知的所有権を保護しつつその実業界での活用を目指す。  高度専門人の知識と研究のブラッシュアップの場と機会を提供する。  産業界との交流を適切に推進するために, 大学としての基本原則を確定する。</p>	<p>3 その他の目標を達成するための措置</p> <p>(1) 社会との連携, 国際交流などに関する目標を達成するための措置</p> <p>社会との連携を積極的に推進するために平成16年度に社会貢献委員会を設置する。</p> <p>(1)-1-1. 地域社会などとの連携・協力, 社会サービスなどに係る具体的方策  「一橋大学公開講座」(周辺6自治体教育委員会後援), 「開放講座」(社団法人如水会協賛(同窓会)), 「移動講座」などの公開講座, 講演会, フォーラム, シンポジウムなどをさらに充実する。  附属図書館保有の文化財資源の展示などを行う。  研究成果を適宜インターネット上で公開する。</p> <p>(1)-1-2. 産学官連携の推進に関する具体的方策  企業などとの共同研究プロジェクトの実施, 及び委託研究受入などを基礎として, 企業などから客員講師を招き, インテンシブセミナー, 客員講義など実施できるよう, 平成18年度までにカリキュラム改革を検討する。  各教員による政策提言, 産・官との共同研究, 審議会などへの参加, 助言活動などの社会貢献実績をデータベース化し, 公開する。  インターンシップなど社会との関係を深める教育活動を整備する。  平成19年度までに産学共同コンソーシアムを形成し, 相互に講義を行う。  エグゼクティブを対象とする講義やセミナーを行う。  経済界や官公庁, 法曹界などとの共同研究・人事交流を推進する。  客員研究員制度を充実する。  公共性・専門性の高い職務についている職業人の委託教育などリカレント教育を推進する。  平成16年度に産学連携を統括する窓口を設ける。  平成16年度に兼業規則などを定める。</p> <p>(1)-1-3. 地域の公私立大学などとの連携・支援に関する具体的方策  複合領域・学際領域での4大学連合における協力関係を一層緊密なものにする。  多摩4大学や津田塾大学との単位互換制度の改善を図る。</p>
<p>(1)-2. 教育研究における国際交流・協力などに関する基本方針</p> <p>言語及び専門能力において国際的に貢献し得る人材(日本人学生・留学生とも)を育成する。  国際交流協定校とのネットワークを質的に強化する。  海外への研修及び内外から客員研究員を招くことに</p>	<p>(1)-2-1. 留学生交流その他諸外国の大学などとの教育研究上の交流に関する具体的方策</p> <p>国連など国際機関との教育研究連携を推進する。  日本人学生に対し, 海外留学・研修の機会を与えるべく制度整備を図る。また, 留学準備講習会を開設するなど, 派遣留学生支援対策を充実する。  英語による教育プログラムを充実する。  平成16年度から事務担当者に対する語学研修を進める。  外国語能力のある研究支援スタッフを質量ともに拡大することをめざす。</p>

より、学際的、国際的研究を促進し、研究の質の向上を図る。  
 社会科学の世界的研究拠点となるための施策を重点的に実行し、国際共同研究センターを中心として、情報・人的ネットワークにおけるアジアの「ハブ」を目指す。  
 同窓会（如水会）との連携のもとに海外に拠点を設ける。

教員を相互に派遣するなど、国際教育交流を図る。  
 派遣留学生、受け入れ留学生向けの大学独自の奨学金財源の確保に努める。  
 外国語による研究発表を支援、促進する。  
 帰国留学生の現地での同窓会組織の形成を図る。  
 平成16年度から海外のいくつかの主要都市に拠点を設け、とくに重要な大学や研究機関、産業界、現地同窓会（如水会）、留学生同窓会との連携を深め、グローバルな情報・人的ネットワークの要とする。  
 (1)-2-2. 教育研究活動に関連した国際貢献に関する具体的方策  
 留学生を積極的に受け入れ、高度な専門知識、高い日本語能力を与える。また、能力の高い留学生を派遣し、受け入れ校の教育に貢献する。  
 海外からの受験を可能とするなど、入学試験制度について平成16年度から検討し、外国人留学生を積極的に受け入れ、質の高い教育を行う。

<p>業務運営の改善及び効率化に関する目標</p> <p>1 運営体制の改善に関する目標</p> <p>1-1. 効果的な組織運営や戦略的な学内資源配分の実現などに関する基本方針</p> <p>学長及び部局長を中心とするダイナミックで機動的な運営体制の確立を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の自主性・自律性の向上</li> <li>・迅速で的確な意思決定とそのプロセスの透明性の確保</li> </ul> <p>責任の所在の明確化とそれに応じた権限分配による効率的な運営システムを構築する。</p> <p>教育及び研究について全学的な戦略的マネジメント機能を強化する。</p>	<p>業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>1 運営体制の改善に関する目標を達成するための措置</p> <p>1-1. 全学的経営戦略の確立に関する具体的方策</p> <p>学長のリーダーシップを強化するため、理事のほかに学長補佐、役員補佐を設けるとともに、学長及び役員などを支援する事務組織全体を再編する。なお、学長・副学長（理事）などの役員などを直接支援する事務組織として学長室を新設する。</p> <p>全学委員会として経営企画委員会を新設し、大学運営の将来計画など重要事項について審議を行う。</p> <p>1-2. 運営組織の效果的・機動的な運営に関する具体的方策</p> <p>全学委員会の見直しを行い、統合・廃止により委員会数及び委員数を必要最小限にとどめるとともに、委員長を原則として副学長にすることにより効率的・機動的・戦略的な運営体制を構築する。</p> <p>学長の権限授与により、副学長（理事）に対してあらかじめ特定の業務領域に関して包括的に全面的な決定権限及び執行権限を与え、機動的・効率的な運営を図る。</p> <p>大学としての迅速な意思形成を促進するため、役員会による学内施策の提案や部局案件について、経営協議会、教育研究評議会及び部局教授会での審議事項はより精選したものとす。</p> <p>1-3. 学部長などを中心とした機動的・戦略的な学部など運営に関する具体的方策</p> <p>部局長のリーダーシップ機能の強化、評議員及び部局長のブレーンとなる教員などによる補佐体制の確立、部局内の各種委員会の機能整備と効率的運営などを図る。</p> <p>1-4. 教員・事務職員などによる一体的な運営に関する具体的方策</p> <p>事務職員の全学委員会への参画を拡大し、教員と連携協力し大学運営の企画立案にあたる。</p> <p>1-5. 全学的視点から戦略的な学内資源配分に関する具体的方策</p> <p>外部資金や競争的研究資金の一部を全学的にプールして、全学的視点から、本学の競争力の強化、基礎研究の充実、国際的地位向上などに活用する資金配分システムを構築する。</p> <p>1-6. 学外の有識者・専門家の登用に関する具体的方策</p> <p>非常勤理事を学外から招へいするとともに、学長補佐を学外から招へいすることを検討する。</p> <p>1-7. 内部監査機能の充実に関する具体的方策</p> <p>監事のもと、内部監査システムを構築し、その運用体制の整備を図る。</p>
<p>2 教育研究組織の見直しに関する目標</p> <p>2-1. 教育研究組織の柔軟かつ機動的な編成・見直しなどに関する基本方針</p> <p>教育研究の進展や社会的要請に応じ、適切な評価に基づきつつ、本学の基本目標の達成に向けた教育研究組織の改革を進める。</p> <p>(本学の基本目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 新しい社会科学の探究と創造</li> <li>(2) 国内、国際社会への知的貢献・実践的貢献</li> <li>(3) 構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成</li> </ul> <p>理論・政策・実証のバランスの取れた研究を推進するとともに、学際的・学融合的な研究を推進する体制を</p>	<p>2 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置</p> <p>2-1. 教育研究組織の編成・見直しのシステムに関する具体的方策</p> <p>学長の諮問機関として、「研究カウンスル」を設置する。</p> <p>学長の統括の下で、研究カウンスルの原案を基にして、経営企画委員会及び大学評価委員会を中心に教育研究組織の改革構想案を策定する。</p> <p>学内共同教育研究施設の在り方について検討する。</p> <p>2-2. 教育研究組織の見直しの方向性</p> <p>時限付き研究施設であるイノベーション研究センターの将来構想を策定し、その改革を進める。</p> <p>平成16年度に学長直属の組織として、産学連携を統括する窓口を設置する。</p> <p>海外に研究教育拠点を設置するとともに、グローバルな人的ネットワークの構築に努める。</p> <p>法科大学院を開設する。</p> <p>公共政策大学院の設置を推進する。</p> <p>知的財産大学院の設置構想を検討する。</p>

<p>構築する。 学内外の連携による共同研究の積極的推進を可能にするような研究組織及び研究支援体制を構築する。</p>	<p>2-3. 学科・専攻などの設置に伴う、授与する学位の種類など 法学研究科「専門職学位課程」(新設：法科大学院)法務専攻：「法務博士」の授与</p>
<p>3 人事の適正化に関する目標 3-1. 戦略的・効果的な人的資源の活用や非公務員型を生かした柔軟かつ多様な人事システムの構築などに関する基本方針 世界的レベルの研究教育を実現し、戦略に基づいた研究教育を推進するために、雇用形態、勤務形態、給与形態などの面で多様で柔軟性に富んだ教員人事システムの構築を図る。 大学運営の基本方針に基づき事務組織の効率的な運用を可能にするため事務的業務の見直し及び効率化を図るとともに、人的資源の効果的配置による最大効率を目指す。 事務職員の専門職能集団としての機能を十分に発揮するため研修制度の充実を図るとともに、研修の結果、高度の専門的知識・能力等を高めたと認められる者に対する処遇について検討する。</p>	<p>3 教職員の人事の適正化に関する目標を達成するための措置 3-1. 人事評価システムの整備・活用に関する具体的方策 多様な側面(教育業績、研究業績、大学運営参画、審議会委員等社会的貢献など)を基準とした教員個人評価制度を構築し、実施することを目指す。 事務職員の専門的な職能の向上を図り、その到達程度を量るシステムの基準・内容等の具体性及びそれらに基づく処遇制度の導入について検討する。 3-2. 柔軟で多様な人事制度の構築に関する具体的方策 雇用形態、勤務形態、職の種類、給与形態などの面で労働法令の下で可能な限り多様で柔軟性に富んだ教員人事制度を構築する。 教員ポスト中に学長運用枠を設け、重点領域研究や大学プロジェクトの推進及び教育研究組織の整備・改編等に柔軟に利用する。 平成16年度に兼業規定を整備し、教員の兼業の許容範囲を広げる。 高い個人評価を得た教員の処遇方法を検討する。 事務組織上、職域ごとの専門性に応じたグループ制の導入を図るとともに、それに対応して職階制の見直しを検討する。 高度の専門的知識及び事務処理能力等を有する者を確保するための方策について検討する。 3-3. 任期制・公募制の導入など教員の流動性向上に関する具体的方策 任期付教員制度を積極的に活用できるように整備する。 教員の企業等との人事交流を促進できるように制度的整備を行う。 国内外の著名研究者の招聘制度や有力研究者の特別処遇制度などの導入を図る。 有望な若手研究者確保のため、任期付専任講師など特別な雇用制度を導入する。 事務職員の採用のうち、高度で、かつ、最新の知識を必要とする場合等必要に応じて任期を定めた採用方法の導入を検討する。 3-4. 外国人・女性などの教員採用の促進に関する具体的方策 外国人・女性の教員採用が拡大するように配慮する。 事務職員採用時において、年齢構成を勘案する等人事上の考慮すべき事情に配慮するとともに女性職員の登用について積極的に取り組む。 3-5. 事務職員などの採用・養成・人事交流に関する具体的方策 新規採用者は原則として関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験合格者から採用する。 大学職員として特に必要とする情報処理能力及び英会話等の語学力の向上を図るため、外部の専門機関との提携による研修を行う。 法律、広報、情報処理、英会話等高度の専門性と実務能力を有する事務職員の採用方法等について大学運営上の観点から検討する。 他の国立大学法人及び関係諸団体との人的交流を進める。 3-6. 中長期的な観点に立った適切な人員(人件費)管理に関する具体的方策 定員の管理に代えて教員人件費の管理に重点を置くものとし、毎年度、一橋大学教員定数等配置計画を作成するなどにより、人件費の効率的かつ戦略的な配分を行うと共に、教育研究の一層の充実発展を実現するため、外部資金等による人件費枠の拡大を目指す。 事務的業務について見直し・効率化を図るとともに、人的資源の効果的配置による最大効率をめ</p>

<p>4 事務などの効率化・合理化に関する目標</p> <p>4-1. 事務処理の効率化・合理化や、事務組織の機能・編成の見直しなどに関する基本方針</p> <p>限られた人材資源を最も効果的に運用して、教育研究活動及び迅速・機動的な大学運営を支える事務組織を編成する。</p> <p>事務の集中化、情報化及びアウトソーシングなどにより、事務処理の効率化・合理化・迅速化を図る。</p> <p>高度情報化社会にふさわしい軽快かつセキュアな情報基盤を構築する。</p> <p>事務組織が大学運営の専門職能集団としての機能を発揮するように、事務職員の専門性向上を図る。</p>	<p>ざすための具体的な点検・評価の方法等について検討する。</p> <p>4 事務などの効率化・合理化に関する目標を達成するための措置</p> <p>4-1. 事務組織の機能・編成の見直しに関する具体的方策</p> <p>法人移行時は、事務局長の下に学長室、総務部（2課）、財務部（2課）、学務部（4課1室）及び学術・図書部（3課）の4部11課2室を置く事務組織とする。さらに、中期目標期間中に事務組織の自己点検・評価を行い、改善を図る。</p> <p>附属図書館及び学内共同研究施設（イノベーション研究センターを除く）の事務組織については、事務局に編入し、再編する。</p> <p>学生サービス業務の情報化とともに窓口事務の一元化（ワンストップサービス）を実現するとともに、学生センターの設置を検討し、その任にあたる。</p> <p>事務職員を対象とする専門分野別研修など各種研修を検討し、事務職員の専門性の向上を図る。</p> <p>4-2. 事務処理の効率化・合理化に関する具体的方策</p> <p>電子事務局構想の実現に向けた全学情報化推進体制を確立し、教職員、学生等からの諸手続などについて、IT技術を積極的に活用したペーパーレス化（情報化）を順次実現し、事務処理全般に渡る効率化・迅速化を図る。</p> <p>全学構成員の基本情報の一元管理とその総合認証システムを構築・運用することで、学生証及び教職員の職員証をICカード化し、各種サービスの充実と情報セキュリティの向上を実現する。</p> <p>教務・学生関連事務処理の効率化を図るとともに学生等のアクセシビリティ（利用のしやすさ）を念頭としたノンストップサービス体制を構築し、総合的な学生サービスの向上を図る。</p> <p>4-3. 業務のアウトソーシングなどに関する具体的方策</p> <p>経理業務、情報処理業務、施設管理業務及び附属図書館業務などのアウトソーシングについて検討する。</p>
<p>財務内容の改善に関する目標</p> <p>1 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標</p> <p>積極的に外部研究資金の導入を図る。</p> <p>大学支援団体との密接な連携による収入の獲得及び開かれた大学として施設使用料収入などの獲得など、多様な収入確保の方策を検討する。</p> <p>これら自己収入の獲得においては、計画的な収支計画を作成し、その効率的運営に努める。</p>	<p>財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>1 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置</p> <p>1-1. 科学研究費補助金、受託研究、奨学寄附金など外部資金の増加に関する具体的方策</p> <p>科学研究費補助金、受託研究、奨学寄附金など外部資金の増加に関する具体的計画を策定する。</p> <p>上の外部研究資金導入のための体制を確立する。</p> <p>上の体制に基づき、科学研究費補助金など競争的資金に積極的に応募する。</p> <p>外部支援団体と密接な交流のための体制を確立する。</p> <p>1-2. 収入を伴う事業の実施に関する具体的方策</p> <p>施設使用料などの増加に努める。</p>
<p>2 経費の抑制に関する目標</p> <p>管理業務の節減を行うことにより、固定的経費の節減を図る。</p> <p>効率的な施設運営を行うことなどにより、経費の節減を図る。</p>	<p>2 経費の抑制に関する目標を達成するための措置</p> <p>2-1. 管理的経費の抑制に関する具体的方策</p> <p>電子事務体制を確立し、効率的な運営に努め、管理的経費の縮減に努める。</p> <p>業務を分析し、アウトソーシングについて模索する。</p> <p>光熱水料の節減に努める。</p>
<p>3 資産の運用管理の改善に関する目標</p> <p>全学的かつ経営的視点に立って大学が保有する資産（土地、施設、設備など）の効果的・効率的な運用を図る。</p>	<p>3 資産の運用管理の改善に関する目標を達成するための措置</p> <p>3-1. 資産の効率的・効果的運用を図るための具体的方策</p> <p>都心型大学の現状にかんがみ、効果的・効率的な運用に努める。</p> <p>資金運用及び管理については、資金計画を策定し、運用益の確保に努める。</p>
<p>自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標</p>	<p>自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するための措置</p> <p>1 評価の充実に関する目標を達成するための措置</p>

<p>1 評価の充実に関する目標</p> <p>学生による授業評価や教員評価システムなども活用した自己点検評価及び外部評価を定期的実施し、評価結果を教育研究及び大学運営の改善に役立てるとともに、社会にも公表する。</p> <p>自己点検・評価体制及びその支援体制の見直しを行い、改善を図る。</p>	<p>1-1. 自己点検・評価の改善に関する具体的方策</p> <p>大学評価委員会を中心にして、評価体制及び評価支援システムなどの充実を図る。</p> <p>自己点検・評価を効率的に実施するために、各種基礎データに関する大学情報収集・分析システムを構築するとともに、当該システムの運営支援体制を整備する。</p> <p>1-2. 評価結果を大学運営の改善に活用するための具体的方策</p> <p>研究貢献、教育貢献、大学運営貢献、社会貢献、学会活動の5項目について教員の活動状況をデータベース化し、そのデータに基づく公平、かつ、適切な教員評価システムの在り方について検討するとともに、優れた教員を支援する体制を整備する。</p> <p>現在実施している学部生による授業評価について評価を行い、授業評価の在り方を再検討して改善を図る。また、大学院開講科目についても学生の授業評価を実施する。</p> <p>評価結果を関係部局、各種委員会などに通知するとともに、その統計情報をホームページなどにより学内外に公表する。また、その情報に対する各層からの意見、改善提案などを収集するシステムを構築する。</p> <p>中期目標・中期計画の策定・実施、点検・評価及び改善計画など一連のサイクルとその実施及び責任体制を明確化し、これを自己点検評価システムとして整備（構築）する。</p>
<p>2 情報公開などの推進に関する目標</p> <p>教育研究及び社会貢献活動の実績並びに大学運営の実態に関する透明性の確保のため、大学の持つ各種情報を社会に対し積極的に提供する。</p> <p>産・学・官連携を推進するため、必要な情報の収集・提供に努める。</p>	<p>2 情報公開などの推進に関する目標を達成するための措置</p> <p>2-1. 大学情報の積極的な公開・提供及び広報に関する具体的方策</p> <p>学内の広報体制の見直しを行い、副学長（理事）を委員長とする広報委員会に責任の集約を図り、広報活動の機動性と充実を図る。また、大学ホームページの充実化と迅速な更新を可能にする管理運営体制を整備する。</p> <p>大学の持つ各種情報を体系的にデータベース化し、情報を適切に加工して社会に提供するため大学の情報発信サービス機能の充実を図る。</p> <p>大学ホームページ、広報誌などの点検見直しを行い、特に大学ホームページを活用した各教員の教育研究情報の提供を充実させるなど、適切で効果的な情報提供に努める。</p> <p>産・学・官連携を推進するため、研究成果などに関する情報提供の充実を図る。</p>
<p>その他業務運営に関する重要目標</p> <p>1 施設設備の整備・活用などに関する目標</p> <p>1-1. 大学の教育研究などの目標や経営戦略を踏まえ、良好なキャンパス環境を形成するための基本方針</p> <p>長期的視野に立った施設設備・管理の実施</p> <p>施設設備の整備・利用状況などを点検し、研究教育のスペースの適正な配分、施設設備に関する長期的な構想を策定及び計画的な施設整備・管理を行うとともに、施設の有効活用の推進を図る。</p>	<p>その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置</p> <p>1 施設設備の整備などに関する目標を達成するための措置</p> <p>1-1. 施設などの整備に関する具体的方策</p> <p>全学の施設設備の利用実態について点検・評価を実施し、これに基づき整備計画の見直しを行い、施設の効果的・効率的な整備を推進するための長期計画を策定する。</p> <p>昭和45年以前に建設された施設を中心に耐震診断の実施及び改修整備を行い、施設の老朽化対策を実施する。昭和56年以前に建設された施設についても、利用計画、優先させる必要がある場合は、耐震診断の実施及び改修整備を行う。</p> <p>身障者及び高齢者などが円滑に施設設備を利用できるようバリアフリーに配慮する。</p> <p>研究教育活動の展開に応じて、情報・通信機能が円滑に活用できるよう、必要となる情報処理関連施設、情報通信機器、インフラストラクチャー及び情報通信システムの拡充を図る。</p> <p>国内外の多様な研究者を招聘できるように、中長期滞在用の宿泊施設の充実を図る。</p> <p>新たな施設整備の手法として、外部資金などの財源確保について検討する。</p> <p>1-2. 施設などの有効活用及び維持管理に関する具体的方策</p> <p>研究室の拡充・整備に努める。</p> <p>多様化、高度化する研究教育の要求に対応できるスペースの確保に努めるとともに、点検・評価に基づき、スペース配分の適正化を推進し、既存施設設備の活性化を図る。</p>



	<p>歴史的建造物の機能改善と老朽化対策を実施し、長期的な保存に努める。          キャンパスアメニティの向上を目指し、構内緑地の保全、広場などのコミュニケーションスペースの確保及び防犯対策に努める。</p>
<p>2 安全管理に関する目標          安全な教育研究環境の確保及び管理体制の確立を図る。</p>	<p>2 安全管理に関する目標を達成するための措置          2-1. 労働安全衛生法などを踏まえた安全管理・事故防止に関する具体的方策          労働安全衛生法など関連法令を踏まえた安全管理体制を整備する。          2-2. 学生などの安全確保などに関する具体的方策          教育環境における安全管理のための施策を模索する。          盗難や事故などの防止のための学内セキュリティの確保に努める。</p>
	<p>(以下別紙)          予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画          短期借入金の限度額          重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画          剰余金の使途          その他          1 施設・設備に関する計画          2 人事に関する計画          3 中期目標期間を超える債務負担</p>

## 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

別紙参照

### 短期借入金の限度額

短期借入金の限度額

1. 短期借入金の限度額

16億円

2. 想定される理由

運営費交付金の受入れ遅延及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借入れすることも想定される。

### 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画

重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画  
なし

### 剰余金の使途

決算において剰余金が発生した場合は、「教育研究の質の向上及び組織運営の改善」に充てる。

## その他

### 1. 施設・設備に関する計画

#### 施設・設備に関する計画

施設・設備の内容	予定額(百万円)	財 源
小規模改修	総額 162	施設整備費補助金(162)

### 2. 人事に関する計画

#### 1. 人事制度の整備

- 1) 人事の流動性・多様性を高め優秀な人材を確保するため、契約職員制の導入や任期制の活用など雇用形態等の多様化を図る。
- 2) 本学の運営方針、教育研究との関連性及び社会的貢献等を考慮して兼業規則を整備し、教員兼業の適切な運用を図る。

#### 2. 人員の確保

- 1) 本学の中期目標・中期計画に基づき各部局の教育研究活動に必要な人員を計画的に確保する。
- 2) 事務効率の向上を図り事務職員の適正配置を行うとともに、新たに実施される関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験により優秀な人材を確保する。

#### 3. 研修等の実施

- 1) 新採用教員に対しFD(ファカルティ・ディベロップメント)を含めた初任研修を行う。
- 2) 事務職員に対し外部機関との提携による法律、情報処理、語学等の専門的な研修を実施する。
- 3) 他の国立大学法人及び関係団体との人事交流を進める。

#### 4. 人件費管理

- 1) 計画的な教員配置計画の作成等により人件費の効率的・戦略的な運用を行う。さらに、外部資金等の獲得などにより教員人事の一層の弾力的運用を図る。

(参考) 中期目標期間中の人件費総額見込み 40,537百万円(退職手当は除く)

### 3. 中期目標期間を超える債務負担

#### 中期目標期間を超える債務負担

(PFI事業)

計画の予定なし

(長期借入金)

計画の予定なし

(リース資産)

計画の予定なし

(別紙) 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

平成16年度～平成21年度 予算

(単位 百万円)

区 分	金 額
収入	
運営費交付金	35,736
施設整備費補助金	162
船舶建造費補助金	0
施設整備資金貸付金償還時補助金	3,656
国立大学財務・経営センター施設費交付金	0
自己収入	22,219
授業料及入学金検定料収入	21,526
附属病院収入	0
財産処分収入	0
雑収入	693
産学連携等研究収入及び寄附金収入等	2,656
長期借入金収入	0
計	64,429
支出	
業務費	57,955
教育研究経費	51,177
診療経費	0
一般管理費	6,778
施設整備費	162
船舶建造費	0
産学連携等研究経費及び寄附金収入等	2,656
長期借入金償還金	3,656
計	64,429

[人件費の見積り]

中期目標期間中総額 40,537百万円を支出する。(退職手当は除く)

注) 人件費の見積りについては、17年度以降は16年度の人件費見積り額を踏まえ試算している。

注) 退職手当については、国立大学法人一橋大学職員退職手当規程に基づいて支給することとするが、運営費交付金として措置される額については、各事業年度の予算編成過程において国家公務員退職手当法に準じて算定される。

注) 組織設置に伴う学年進行の影響は考慮していない。

## 〔運営費交付金の算定ルール〕

毎事業年度に交付する運営費交付金については、以下の事業区分に基づき、それぞれの対応する数式により算定したもので決定する。

### 〔学部教育等標準運営費交付金対象事業費〕

「一般管理費」：管理運営に必要な職員（役員含む）の人件費相当額及び管理運営経費の総額。

$L(y-1)$ は直前の事業年度における  $L(y)$ 。

「学部・大学院教育研究経費」：学部・大学院の教育研究に必要な設置基準上の教職員の人件費相当額及び教育研究経費の総額。 $D(y-1)$ は直前の事業年度における  $D(y)$ 。 $(D(x))$ は、設置基準に基づく教員にかかる給与費相当額。）

「附属学校教育研究経費」：附属学校の教育研究に必要な標準法上の教職員の人件費相当額及び教育研究経費の総額。 $D(y-1)$ は直前の事業年度における  $D(y)$ 。 $(D(x))$ は、標準法に基づく教員にかかる給与費相当額。）

「教育等施設基盤経費」：教育研究等を実施するための基盤となる施設の維持保全に必要となる経費。 $F(y-1)$ は直前の事業年度における  $F(y)$ 。

### 〔学部教育等標準運営費交付金対象収入〕

「入学料収入」：当該事業年度における入学定員数に入学料標準額を乗じた額。（平成15年度入学料免除率で算出される免除相当額については除外）

「授業料収入」：当該事業年度における収容定員数に授業料標準額を乗じた額。（平成15年度授業料免除率で算出される免除相当額については除外）

### 〔特定運営費交付金対象事業費〕

「学部・大学院教育研究経費」：学部・大学院の教育研究活動の実態に応じ必要となる教職員の人件費相当額及び教育研究経費の総額。 $D(y-1)$ は直前の事業年度における  $D(y)$ 。

「附属学校教育研究経費」：附属学校の教育研究活動の実態に応じて必要となる教職員の人件費相当額及び教育研究経費の総額。 $D(y-1)$ は直前の事業年度における  $D(y)$ 。

「教育研究診療経費」：附属病院の教育研究診療活動に必要となる教職員の人件費相当額及び教育研究診療経費の総額。 $E(y-1)$ は直前の事業年度における  $E(y)$ 。

「附置研究所経費」：附置研究所の研究活動に必要となる教職員の人件費相当額及び事業経費の総額。 $E(y-1)$ は直前の事業年度における  $E(y)$ 。

「附属施設等経費」：附属施設の研究活動に必要となる教職員の人件費相当額及び事業経費の総額。 $E(y-1)$ は直前の事業年度における  $E(y)$ 。

「特別教育研究経費」：特別教育研究経費として、当該事業年度において措置する経費。

「特殊要因経費」：特殊要因として、当該事業年度に措置する経費。

### 〔特定運営費交付金対象収入〕

「その他収入」：検定料収入，入学料収入（入学定員超過分），授業料収入（収容定員超過分），雑収入。平成16年度予算額を基準とし，中期計画期間中は同額。

### 〔附属病院運営費交付金対象事業収入〕

「一般診療経費」：附属病院の一般診療活動に必要な人件費相当額及び一般診療経費の総額。平成16年度予算額を基準とし，中期計画期間中は同額。

「債務償還経費」：債務償還経費として、当該事業年度において措置する経費。

「附属病院特殊要因経費」：附属病院特殊要因経費として、当該事業年度に措置する経費。

〔附属病院運営費交付金対象収入〕

「附属病院収入」：附属病院収入。J(y-1)は直前の事業年度におけるJ(y)。

$$\text{運営費交付金} = A(y) + B(y) + C(y)$$

1. 毎事業年度の教育研究経費にかかる学部教育等標準運営費交付金及び特定運営費交付金については、以下の数式により決定する

$$A(y) = D(y) + E(y) + F(y) + G(y) - H(y)$$

$$(1) D(y) = \{D(y-1) \times (\text{係数}) \times (\text{係数}) - D(x)\} \times (\text{係数}) + D(x)$$

$$(2) E(y) = E(y-1) \times (\text{係数}) \times (\text{係数})$$

$$(3) F(y) = F(y-1) \times (\text{係数}) \pm (\text{施設面積調整額})$$

$$(4) G(y) = G(y)$$

$$(5) H(y) = H(y)$$

D(y)：学部・大学院教育研究経費( )，附属学校教育研究経費( )を対象。

E(y)：教育研究診療経費( )，附属研究所経費( )，附属施設等経費( )を対象。

F(y)：教育等施設基盤経費( )を対象。

G(y)：特別教育研究経費( )を対象。

H(y)：入学料収入( )，授業料収入( )，その他収入( )を対象。

2. 毎事業年度の診療経費にかかる附属病院運営費交付金については、以下の数式により決定する。

$$B(y) = I(y) - J(y)$$

$$(1) I(y) = I(y)$$

$$(2) J(y) = J(y-1) + K(y)$$

$$[K(y) = J(y) \times (\text{係数}) - J(y)]$$

〔その他〕附属病院運営費交付金算定ルールは、診療分の運営費交付金を受ける附属病院のみ適用。

I(y)：一般診療経費( )，債務償還経費( )，附属病院特殊要因経費( )を対象。

J(y)：附属病院収入( )を対象。(J(y)は、平成16年度附属病院収入予算額。K(y)は、「経営改善額」。)

3. 毎事業年度の一般管理費等にかかる学部教育等標準運営費交付金及び特定運営費交付金については、以下の数式により決定する。

$$C(y) = L(y) + M(y)$$

$$(1) L(y) = L(y-1) \times (\text{係数})$$

$$(2) M(y) = M(y)$$

L(y)：一般管理経費( )を対象。

M(y)：特殊要因経費( )を対象。

〔諸係数〕

(アルファ)：効率化係数。 1%とする。

(ベータ) : 教育研究政策係数。物価動向等の社会経済情勢等及び教育研究上の必要性を総合的に勘案して必要に応じ運用するための係数。各事業年度の予算編成過程において当該事業年度における具体的な計数値を決定。なお、物価動向等の社会経済情勢等を総合的に勘案した係数を運用する場合には、一般管理経費についても必要に応じ同様の調整を行う。

(ガンマ) : 教育研究組織係数。学部・大学院等の組織整備に対応するための係数。

各事業年度の予算編成過程において当該事業年度における具体的な計数値を決定。

(イブシロン) : 施設面積調整額。施設の計年別保有面積の変動に対応するための調整額。各事業年度の予算編成過程において当該事業年度における具体的な調整額を決定。

(ラムダ) : 経営改善係数。2%とする。平成17年度以降、中期計画中に相当程度の収支改善を求めためるための係数。

注) 運営費交付金は上記算定ルールに基づき、一定の仮定の下に試算されたものであり、各事業年度の運営費交付金については、予算編成過程においてルールを適用して再計算され、決定される。

なお、運営費交付金で措置される「特別教育研究費」「特殊要因経費」については、17年度以降は16年度と同額と算定しているが、教育研究の進展等により所要額の変動が予想されるため、具体的な額については、各事業年度の予算編成過程において決定される。

注) 施設整備費補助金、船舶建造費補助金、国立大学財務・経営センター施設費交付金、長期借入金収入は、別紙の「施設・設備に関する計画」に記載した額を計上している。

注) 施設整備資金貸付金償還時補助金は、償還計画に基づく所要額を計上している。

注) 自己収入、産学連携等研究収入及び寄附金収入等については、平成12年度～平成14年度の受入れ実績を基礎により試算した収入予算額を計上している。

注) 産学連携等研究収入及び寄附金収入等は、著作権及び特許権等収入を含む。

注) 業務費、施設整備費、船舶建造費については、平成16年度予定予算額を基礎により試算した支出予定額を計上している。

注) 産学連携等研究経費及び寄附金事業費等は、産学連携等研究収入及び寄附金収入等により行われる事業経費を計上している。

注) 長期借入金償還金については、償還計画に基づく所要額を計上している。

注) 運営費交付金算定ルールに基づく試算において「教育研究政策係数」「教育研究組織係数」は1とし、また、「施設面積調整額」については、面積調整はないものとして試算している。



## 2. 収支計画

## 平成16年度～平成21年度 収支計画

(単位 百万円)

区 分	金 額
費用の部	
經常費用	57,900
業務費	55,818
教育研究経費	12,173
診療経費	0
受託研究費等	164
役員人件費	760
教員人件費	32,626
職員人件費	10,095
一般管理費	1,814
財務費用	0
雑損	0
減価償却費	268
臨時損失	0
収入の部	
經常収益	57,900
運営費交付金	32,855
授業料収益	17,973
入学金収益	2,618
検定料収益	935
附属病院収益	0
受託研究等収益	164
寄附金収益	2,394
財務収益	0
雑益	693
資産見返運営費交付金等戻入	261
資産見返寄附金戻入	7
資産見返物品受贈額戻入	0
臨時利益	0
純利益	0
総利益	0

注) 受託研究費等は、受託事業費、共同研究費及び共同事業費を含む。

注) 受託研究等収益は、受託事業収益、共同研究収益及び共同事業収益を含む。

### 3. 資金計画

#### 平成16年度～平成21年度 資金計画

(単位 百万円)

区 分	金 額
資金支出	65,440
業務活動による支出	57,632
投資活動による支出	3,141
財務活動による支出	3,656
次期中期目標期間への繰越金	1,011
資金収入	65,440
業務活動による収入	60,611
運営費交付金による収入	35,736
授業料及び入学金検定料による収入	21,526
附属病院収入	0
受託研究等収入	164
寄附金収入	2,492
その他の収入	693
投資活動による収入	3,818
施設費による収入	3,818
その他の収入	0
財務活動による収入	0
前期中期目標期間よりの繰越金	1,011

〔注〕施設費による収入には、独立行政法人国立大学財務・経営センターにおける施設費交付事業に係る交付金を含む。

〔注〕前期中期目標期間よりの繰越金には、奨学寄附金に係る国からの承継見込額1,011百万円を含む。

(別表)

## 一橋大学における基本的教育研究組織の概要

中期目標		中期計画		年度計画	
別表(学部、研究科等)		別表(収容定員)		別表(学部の学科、研究科の専攻等)	
学部	商学部	1,100人		商学部	経営学科
	経済学部	1,100人		経済学部	商学科
研究科	法学部	855人		経済学部	経済学科
	社会学部	940人		法学部	法律学科
附置研究所	商学研究科	273人		社会学部	社会学科
	経済学研究科		うち修士課程 156人 博士課程 117人	商学研究科	経営・会計専攻 市場・金融専攻
	法学研究科	271人		経済学研究科	経済理論・経済統計専攻 応用経済専攻 経済史・地域経済専攻 比較経済・地域開発専攻
	社会学研究科		うち修士課程 154人 博士課程 117人	法学研究科	法学・国際関係専攻 法務専攻
	言語社会研究科	298人		社会学研究科	地球社会研究専攻 総合社会科学専攻
	国際企業戦略研究科		うち修士課程 104人 博士課程 94人 法曹養成課程 100人	言語社会研究科	言語社会専攻
平成16年度	社会学研究科	306人		国際企業戦略研究科	法務・公共政策専攻 経営・金融専攻
	言語社会研究科		うち修士課程 174人 博士課程 132人		
	国際企業戦略研究科	141人			
			うち修士課程 78人 博士課程 63人		
		300人			
			うち修士課程 68人 博士課程 48人 専門職学位課程 184人		

中 期 目 標	中 期 計 画	年 度 計 画
平成 17 年 度	商学部 1,100人 経済学部 1,100人 法学部 790人 社会学部 940人	
	商学研究科 273人 〔うち修士課程 156人〕 博士課程 117人	
	経済学研究科 271人 〔うち修士課程 154人〕 博士課程 117人	
	法学研究科 358人 〔うち修士課程 72人〕 博士課程 86人 法曹養成課程 200人	
	社会学研究科 306人 〔うち修士課程 174人〕 博士課程 132人	
	言語社会研究科 141人 〔うち修士課程 78人〕 博士課程 63人	
	国際企業戦略研究科 330人 〔うち修士課程 84人〕 博士課程 48人 専門職学位課程 198人	

中 期 目 標	中 期 計 画	年 度 計 画
平成 18 年 度	商学部 1,100人 経済学部 1,100人 法学部 735人 社会学部 940人	
	商学研究科 273人	
	[うち修士課程 156人 博士課程 117人]	
	経済学研究科 271人	
	[うち修士課程 154人 博士課程 117人]	
	法学研究科 450人	
	[うち修士課程 72人 博士課程 78人 法曹養成課程 300人]	
	社会学研究科 306人	
	[うち修士課程 174人 博士課程 132人]	
	言語社会研究科 141人	
	[うち修士課程 78人 博士課程 63人]	
	国際企業戦略研究科 330人	
	[うち修士課程 84人 博士課程 48人 専門職学位課程 198人]	

中 期 目 標	中 期 計 画	年 度 計 画
平成 19 年 度	商学部 1,100人 経済学部 1,100人 法学部 680人 社会学部 940人	
	商学研究科 273人 〔うち修士課程 156人〕 博士課程 117人	
	経済学研究科 271人 〔うち修士課程 154人〕 博士課程 117人	
	法学研究科 450人 〔うち修士課程 72人〕 博士課程 78人 法曹養成課程 300人	
	社会学研究科 306人 〔うち修士課程 174人〕 博士課程 132人	
	言語社会研究科 141人 〔うち修士課程 78人〕 博士課程 63人	
	国際企業戦略研究科 330人 〔うち修士課程 84人〕 博士課程 48人 専門職学位課程 198人	

中 期 目 標	中 期 計 画	年 度 計 画
平成 20 年 度	商学部 1,100人 経済学部 1,100人 法学部 680人 社会学部 940人	
	商学研究科 273人	
	[うち修士課程 156人 博士課程 117人]	
	経済学研究科 271人	
	[うち修士課程 154人 博士課程 117人]	
	法学研究科 450人	
	[うち修士課程 72人 博士課程 78人 法曹養成課程 300人]	
	社会学研究科 306人	
	[うち修士課程 174人 博士課程 132人]	
	言語社会研究科 141人	
	[うち修士課程 78人 博士課程 63人]	
	国際企業戦略研究科 330人	
	[うち修士課程 84人 博士課程 48人 専門職学位課程 198人]	

中 期 目 標	中 期 計 画	年 度 計 画
平成 21 年 度	商学部 1,100人 経済学部 1,100人 法学部 680人 社会学部 940人	
	商学研究科 273人	
	[うち修士課程 156人 博士課程 117人]	
	経済学研究科 271人	
	[うち修士課程 154人 博士課程 117人]	
	法学研究科 450人	
	[うち修士課程 72人 博士課程 78人 法曹養成課程 300人]	
	社会学研究科 306人	
	[うち修士課程 174人 博士課程 132人]	
	言語社会研究科 141人	
	[うち修士課程 78人 博士課程 63人]	
	国際企業戦略研究科 330人	
	[うち修士課程 84人 博士課程 48人 専門職学位課程 198人]	